



立ち読み版

小説 大熊狸喜

挿絵 ha-ru

プロローグ	美人教師のファースト・リップ	006
第一章	初恋でした	017
第二章	キラっとした先生の、秘密な素顔	060
第三章	今夜の衣装はエプロンだけ！	102
第四章	ストリップの夜	144
第五章	夜の黒ネコ	197
エピローグ	二人の日常	250

登場人物紹介

Characters



きりええむ 桐絵絵夢

生活指導も受け持っている古文の教師。実家は武術の道場で自身も師範代の腕前。厳しく格好良い言動で学園の不良たちからは恐れられ、一般生徒からは男女共に人気が高い。

くぬぎさかこうた 桐坂耕太

顔はそれなりに整っているが背が低く可愛いという印象で見られがちなのを悩みとしている少年。そのせいか理想の女性は背が高く格好良い大人の女性。

女体の官能が高まった黒髪教師は、更に勃起に吸引抽送で奉仕しながら、自らの指で粘膜を愛撫。性感の高まりを示すように、双乳も女尻も震えている。

男性器の快感反応を理解し始めたのか、女の舌は、本体の裏側やカリ肉部分の後ろ側などを、更に重点的に舐め奉仕してくれた。

「あくっ……先生の、舌が……すぐく、サラサラして……っ！」

敏感な箇所を舌舐めされる度、肉棒はビクッと脈打ち、女教師の上あごをノック。

ガッチガチに興奮する勃起本体が、ヌルヌルの熱い舌で絡められて、ムチムチの口内粘膜でチュウウ……と吸われる。

微弱だけど、鋭くて甘い官能でペニスが責められ、下腹部の奥では発射への力が圧縮。

背筋の熱が勃起へと集められると、もう射精だけがしたいという本能で、意識の全てが埋められていった。耳の奥で血流が響き、周りの音が遠退いてゆく。

「き、桐絵先生……もう、離してっ——あう……このままじゃ、先生の……口に……！」
意識が快感に飲み込まれながら、氣遣う耕太。

閉じそうな臉を必死に堪えて告げた少年に、女の瞳が優しい愛情で蕩ける。そして黒髪の美人担任は、唇を離す事なく、更に奉仕を深めた。

「ん……んく、ちゅっちゅっちゅっちよぶっ！」

——ちゅっちゅぷりゅっくぷちゅっ、んちゅぷちゅつきゅううっちゅぶくぶっ！

唇は、より絞るように密着して、舌の舐め上げも急所に集中。頭の前後も、より早く深く、変化する。

含んだ勃起を解放するどころか、このまま射精を受け入れてくれる意志を示す、美教師。「んくっんんっ、んちゅぷっ——っんぷっ……わ、わたしもふっ——んひゃんんっ——もふっ、ふやああああああああああああっ！」

両腕に挟まれた双乳が、艶と質量をムッチリと増す。指で愛撫する女尻が切なげに振られて、もう限界ですと見せ付けている。

男子生徒に奉仕しながら、女教師も絶頂寸前だった。

「せっ、先生えっ——っん、くふうううっ！」

射精への力で、ペニスの熱と太さが更に増して、小柄な全身が硬直する。上体を支える為に浴槽の縁を掴む両腕は震え、両脚もお尻もビシッと力む。

もうこのまま、早く出したい。

そんな欲求に、意識が支配される。

素直な欲望を読み取った黒髪の担任は、男子生徒に新たな、決定的な刺激をくれた。

閉じそうな臉を耐えて、女教師の唇奉仕を見つめる耕太を、自ら絶頂しそうな愛顔で見上げる。

(っ——っ先生も、いきそうっ……っ！)

恥ずかしい視線が絡み合ったままで、更に濡れた舌先が、勃起先端の鈴口をツプつと突いた。

「っ——っあううっ！」

その途端、男性器全体から腰や背筋、脳裏までが鋭く、快感刺激で灼かれる。

目の前がジリつと白光して、耕太は初めて、唇奉仕での絶頂へと飛翔させられた。

「んぐうっ——つき、桐絵先生 ええっ!!」

同時に、含まれた熱肉棒がビククンつと力強く暴れる。

口内蠢動が性刺激になって、桐絵先生の女体も快感の最高点に到達。

「んくふうううううううっ——んちゅつちゅぶちゅううううっ——んぱっ——わたひっ、イ

イっちやふううっ——ひやあああああんっ!!」

男子生徒の足下で跪いたまま、裸の美女担任は恥ずかしい絶頂を口にした。

ペニスと唇が触れたままの、愛らしい泣き顔にも似た、桐絵先生のいき顔。

耕太は、そんな淫靡な媚顔をハッキリと見つめながら、下腹部からペニスの先端に向かって、絞られるような力の解放を覚えた。

赤い勃起を数センチと手前で突きつけられる、女教師の悦楽な麗顔。

「でっ出ますっ——っ！」

宣言した途端、背筋から腰が絞られて、堅い勃起が絶頂の媚顔へと白濁を放った。

その事実にも、耕太は桐絵先生の深い愛情を感じた。

唇での奉仕を受けて、更に顔射や飲精までして貰った耕太。だけどその快感を受けた勃起は、更なる欲求でより熱血を集めていた。

「き、桐絵先生……僕、もつとしたいです……！」

「え……きゃっ……まだ、こんなに……！」

頂点から降りてきた桐絵先生も、より熱と堅さを増して見える男性器に、驚きながらも瞳を濡らす。

「僕、先生の中でイきたいですっ！」

「えっ——っこ、耕太くん……！」

真っ正面から「欲しい」と告白されて、担任教師はあらためて、耳まで真っ赤に羞恥する。その表情は、純真な少女みたいに清楚だ。

耕太は、Mな先生をもつと恥ずかしく喜ばせてあげたいと考えて、すぐに思ったった。

「先生、来てくださいっ！」

少年は細い掌を掴むと、そのまま早足で浴室を出る。

「えっ、耕太くん……ああんっ！」

裸のまま連れられる女教師は、片手で巨乳を隠しながら、フラつく腰で室内を引かれて歩く。

耕太が先生を連れてきたのは、先日、蛾に似た蝶を放したベランダ。カーテンを開いてガラス戸を開けると、夜の街が輝いて見える。

耕太が何をしようとしているのか解った担任教師は、弱々しくも躊躇った。

「こ、耕太くん……まさかベランダで……っ!!」

「来てください」

男子生徒に手を引かれて、裸の美担任は夜のベランダへと連れ出される。涼しい夜風に肌を撫でられると、外にいるという事実は、更に深く実感出来た。

「やっ——ダ、ダメよ耕太くんっ……外なんて……っ!」

全裸教師が両掌で肢体を隠そうとすると、耕太は両掌を取って、豊かな胸を街に向かつて突き出させる。

「ひやあっ——っや、やめてっ……!」

「先生、大きな声を出すと、みんなに聞こえちゃいますよ」

「ひっ——っ!」

羞恥と怯えで、美人教師は眼下を見た。途端に「誰かに気づかれたら」と思ったのか、静かになる。

「そうです、そのままです」

耕太は背後からそう告げると、両脚を肩幅よりも広く開脚させて、裸の尻を掴んだ。

「ひゃうっ——っこ、耕太くんっ：!!」

静かな声で、怯えた様子で問うてくる桐絵先生。

胸よりも少しだけ低い手すりから、媚顔と大きな乳房を露出させる。更に両腕を手綱のように背後で引くと、背筋を反らせてお尻を突き出した格好にさせた。

「こ、耕太くんっ、こんな格好っ：イヤあ：!!」

マンシヨンのベランダから、媚顔と巨乳を露出させた裸の女教師。しかも両手は背後に取られているから、顔や胸を隠す事も出来ない。

頭だけでも振り向かせようと必死にあえぐ美担任に、少年はまた耳打ち。

「あれ、今誰か、下の人が見上げてませんか？」

「そっ——い、いや：っ！」

誰かに見られる。

そう思った桐絵先生は、媚顔を逸らしながら、恥ずかしそうにキツく目を閉じる。

同時に、女教師の女体がカアッと熱を上げるのが、掴んだ手首からも伝わってきた。

（やっぱり先生、こういうシチュで興奮してる：!!）

考えが的中して、嬉しい少年。モチロン、耕太なりに先生の事も氣遣っている。

普段の自分たちがそうだからだけど、普通に歩いていて、地元のマンシヨンを見上げる事なんて、ほぼ皆無。

仮に見上げたとしても、何気なくで三〜四階くらいだし、ましてや夜のマンションを見上げたところで、八階のベランダなんて、ろくに見えない。

(でも先生からすれば、野外は野外だし……)

誰かに見られたら、という緊張はあるだろう。

息を潜める女教師の裸尻に、耕太はガッチガチの勃起を、ツンと充てる。

「っひゃあううっ——っこ、耕太くんっ……！」

顔と双乳を露出させられた事で、桐絵先生の身体は新たな興奮を得ていたらしい。

女性器に触れた男根は、それだけで蜜溢れる粘膜にちゅぷつと吸い付かれて、愛液まみれにされていた。

堅くて太い肉を突き込みながら、耕太は黒髪の担任教師に白状を迫る。

——っつぶぶ……ちゅぶつぶぶ……。

「先生、さつきは自慰だけだったから、満足してないですよね」

「っ——そ、それは……はああああ……っ！」

挿入されながら羞恥の告白を迫られて、女教師は快感に耐える。

それでも、オナニーとはいえさつき達したばかりの肉体だからか、肉棒で埋められるに従って、腰の力が抜けていった。

突き込まれる太い男性器で押し流されるように、膣内からは熱い果蜜がトロりと溢れて

こぼれる。

「中はヌルヌルですよ。コレが答えですね」

「あつ、ああああ、んんん……」

返す言葉もなく、吐息も羞恥に湿る女教師。

最奥まで挿入すると、タツプリと濡れた膣壁は勃起をヌルヌルと抱擁。早く抽送し
てと、せがんできた。

「僕はこのまましたいです。いきます」

返答を待たずに腰打ちを開始。イキナリ、深く早くと、頂点に向かって激しく腰打つ。

「このまま……待つ——つはひやあああああああつ！」

——つつぶつぷつちゅつぷぶつ、づゅぶづゅぶりゅつつぶづぶちゅつ！

先生の両手首を引きながら、突き出した尻を、強く斜めに勃起責め。ペニスを突き刺される膣壁はアつという間に新たな蜜を溢れさせて、愛情と感謝の締めつけをくれた。

「ひやつあつあつあつんあああああつ——ダつ、ラメええつ——おく、ズンズンひちゃつ——つんつんつんふつ——つまたつ、またイっちゃあああああつ！」

顔も胸も街に向けさせられたまま、背後から深く強い肉棒突きで責められている美教師。両掌を取られているから、揺れる双乳も官能の美顔も隠す事が出来ない。

言葉も蕩ける性感と羞恥に、女体が被虐の官能で燃えているのが、耕太にも解った。

勃起をギリギリまで引くと膣壁は離れないでと吸い付いてきて、奥まで突き込むと溢れる蜜と柔軟な粘膜で抱き締めて歓迎してくれる。

「先生、声を出すと……」

「ひっ——っんっんっ、ラッテへっ——んふっんふうううううううっ……！」

必死に声を抑えるものの、その分、より羞恥に責められる桐絵先生。

抽送の快感だけでなく、羞恥で鼓動がドキッドキッと早まって、一緒に膣壁全体がキュンっキュンっとりズミカルに締まる。

絡みつくような膣粘膜は、ペニスの裏側や高い肉カリ部分の裏など、皮膚薄い敏感な弱点を満遍なく愛撫してくれた。甘い快感で全身が貫かれ、熱を上げてゆく。

膣壁の締めまりを視覚的に見せるみたいに、後孔はムチュムチュと収縮を繰り返す。

肉棒を目いっぱい含まされた膣媚孔からは、次々と愛液が溢れ出る。上気する内股を幾筋も伝い、足下のペランダまで濡らしていた。

初めての時よりも、少しだけ余裕がある耕太。膣壁の締めつけだけでなく、粘膜そのものの感触も楽しみ始めていた。

「先生の中って……粒々してて、すごく気持ちいいですっ……！」

膣壁全体が微細な粒に覆われていて、拙くも愛情を込めて、ペニスを愛撫してくれる。ヌルヌルスルスリとした膣壁の抱き締め愛撫に、さつき射精したばかりの少年の腰が、

二度目の発射へと力を溜めてゆく。

背後から突かれる女教師も、更なる頂点へと突き上げられつつあった。

「んっんふっ——っらっ、ラメへえっ——また、わたひいいいいいいいっ……！」
突き出した巨乳が盛大に揺れて、先端の乳首はツンと硬化し、微細な汗をチラチラつと弾く。

恥ずかしさに紅葉する媚顔は涙を浮かべて、露出の羞恥興奮からか、半開きの唇からは透明な唾液が一筋流れていた。こんなに蕩けた表情、学校では絶対に見られない。

霧状の汗を纏う大きな美尻では、深い谷間の後孔が膣壁と一緒にキュッキュと収縮。

腰は碎けて全身は脱力し、官能の媚顔を晒したまま、頂点に向かって肉突きを受けるしか出来ない女教師。白い肌が上気して震え、絶頂が近いと知らせている。

輝く夜の街を背景に、愛しい女性の恥ずかしい姿を堪能する耕太。

全身の熱が手足から引いて、腰の奥で集まって凝縮。

腰の抽送が勝手に早まると、膣が重く閉じられてゆく。もう射精は、すぐそこだ。

下腹部全体が熱を封じ込めると、ペニス全体が、熱と太さをグンっと増した。

「こっ、こうたくうんっ！」

「桐絵先生っ——っ！」

更なる頂点に手が届いた瞬間、二人はお互いに愛しい相手の名前を呼び合う。



愛撫される少年も、舌責めされる勃起から腰の中心までが、鋭い快感で力みっぱなし。背筋から脳裏までピリピリと痺れ、心臓の鼓動が早まってゆく。

全身が熱を上げて、腰の奥の力が、ギューウウつと圧縮されていった。快感で閉じそうな臉の向こうでは、眼鏡の美教師がフェラチオに熱中。

その姿は完全に、真面目でキビしい女性教師のそれではなかった。

(先生、可愛い…)

愛しい女教師の淫らな姿に、不意にイタズラ。誰もいない屋上で、ちよつと大声で言うてみた。

「体操着を着て、男子生徒のペニスをしゃぶってる、エッチな先生がいますよ〜！」
 言った途端、桐絵先生の背中がビクつと震え、そして弱々しい視線で見上げてくる。

「んふっ——んん……んうん……っ！」

びっくりしたモノの、すぐに耕太のイタズラだと解り、ちよつと恨めしそうな、涙の潤む瞳で見上げる視線。

それでも先生はペニスを放す事なく、口に含んだまま責めるように、泣きそうな目でイヤイヤと首を振った。

同時に、汗で濡れる大きなバストがフルフルと揺れると、太陽の光を浴びてキラリと微細に輝く。

(……折角、おっぱいも露出してゐるんだし……)

柔らかさを見せつける巨乳の姿に、耕太はバストでの奉仕も命じた。

「先生、おっぱいでもしてください」

「ペロ……ふあい……ん……」

服従する女教師は、素直に重たそうな双乳を持ち上げる。吸引の唇でペニスの先端を含んだまま、本体の左右からバストが密着。

——むにゆるん……。

汗で吸い付くような肌触りとなったバストに、勃起の肉が埋められるように挟まれた。柔らかい重みで圧迫されると、膣壁の吸引とは違う媚肉の密着感で、腰の奥までがズクンッと甘電させられる。

「んぐ……先生のっぱい、いつもムッチムチで……気持ちいいです」

「んちゅ……そう……んふふ……ちゅぶん」

少年の言葉に瞳を蕩かし、ブルマのフェラチオ女教師は、パイズリ奉仕へと移行した。両手で巨乳を持ち上げて、左右からの乳肌と勃起を、強く密着。亀頭部分に触れた舌尖から唾液をこぼして、ペニスの肌をヌルヌルにする。

深い谷間に埋められた濡れ男性器は、それでも柔乳の間から、真っ赤な亀頭部分を完全に露出している。

「ああ……強い香り……それに熱くて、胸が、灼けちゃふ……くちゅ、んぶんぶ……」
乳間のペニスを舐めながら、勃起の堅さと、匂いと熱で、女教師の意識が蕩けさせられるようだ。

凜々しい瞳は、もう濡れた輝きと欲求を隠す事は出来ず、キリつとした美顔も官能に蕩けそう。

鈴舌を軽く舌責めした桐絵先生は、巨乳と唇の同時奉仕を開始した。

——つたぶつむちゆるり、むちゅむちゅむちゅるっ、くちゅぶちゅりゅっぺろちゅっ！
「んっんっんっ……あふ、ちゅ……んむちゅっぶちゅゅ……んふ、あん……堅いわ……」

乳房でスリ下ろされると、柔肉に突き込むような抱擁感。更に亀頭部分がヌルヌルの口に含まれながら、先端部分を舌責めで突っつかれる。

スリ上げられると、抱擁感が失われてモノ欲しくされて、腰の奥が切なくされる。肉傘の裏や弱点を、密着する唇で吸われて撫でられて、ガマンの汁がコブンと溢れた。

休まない上下の乳房摩擦で、早く快感が欲しいと腰が力む。性感で脛が重くなる中、耕太は裸巨乳奉仕の眼鏡担任を、デジカメで撮る。

「んん……んぶ……また、こんな姿……あむん……」

羞恥で見上げながら奉仕する女体も、もつと快感が欲しいと、熱い肢体を官能的にくねらせていた。

上半身はペニスに沿って前後して、剥き出しの細いお腹は柔らかくしなる。ブルマに包まれた巨尻はユルユルと左右に振られ、子宮の切なさを訴えていた。

白い肌は紅葉に染まり、乳房も背中も性汗を一筋流す。

唇から、だけの性感では、もう女体は足りない。

「んんちゅ……んぶん……ああ……こうっ——く、くぬぎさか、くうん……っ！」

胸で反り返る、このガッチガちなペニスを、早く奥まで挿入して欲しい。

でもそれには、まず耕太が快感を得てから。

そんな風に理解しているのだろう。女体の欲求に突き動かされた桐絵先生は、早く挿入が欲しくて、バストと唇の愛撫スピードを上げた。

——つむちゅたふちゅつむりゅぬるむちゅるっ、くぶんぶちゅるりゅべろべろっ！

「んぐぐっ——先生、激しいです……っ！」

奉仕が早まったと同時に、ペニスの快感がギュんつと強まる。

勃起の肌から中心に向かって、微弱な性感が休みなく走る。腰の奥では、更に放出の力が溜められてゆく。

肉棒はより強く挟み込まれて、唾液と汗でヌルヌルになった巨乳で密着愛撫される。吸い付くりップにも弱点を責められ続けて、もう溢れるカウパーはノンストップ。

根元まで包まれる幸せ感と、モノ欲しくされる切なさで、少年の肉体も意識も、射精だ

けに向けさせられていった。

心臓の鼓動がドキドキと高鳴って、耳の奥が血流音だけいっぱいになる。

女教師の肉体も性感を高め、鼻腔からの吐息にも熱と湿りを帯びていた。

細い首筋はしなやかに濡れて艶めいて、高い官能を表している。捲り出された背中も汗を纏い、細く柔らかく切なげにしなる。

パツンッと張ったブルマ尻は、お尻を突き出すような格好で子宮の飢餓感を伝えていた。汗光る腿は跪いた肢体を支え、でも飢餓感で微細に震えている。

谷間を制するペニスは、唾液と汗で濡れて糸を引く。唇奉仕する美顔は上気して汗を纏い、まるでお風呂上がりのようにセクシーだ。

含まれる口内では、ぬるっぬるの舌で勃起全体が舐め回されての性感責め。各所の弱点をサラサラの舌で舐められながら、尖らせた舌先で鈴口を強く責められる。

「ぐくっ——っもうすぐ、出ます……っ！」

「っ——んんんっ！」

少年の言葉を受けた女教師が、更に奉仕を強くした。

バストの密着をより高め、唇は更に強く吸引。舌での弱点愛撫も先割れ責めも、リズムカルに纏わり付く。

「んあっ——っこ、腰がっ……ビリビリっ……！」

むっちむちの巨乳で挟まれて、小さな唇で吸われて舌舐めされて、勃起から腰が、微弱だけど連続で痺れた。腰の快感で背中の熱がス…と引くと、小柄な全身が射精に向かって力を溜めて、プルプルと震える。

手足の熱が腰に集まると、射精の引き金は限界まで絞られた。

薄く耐える瞳には、体操着姿で乳房剥き出しの、桐絵先生。

「んぶっちゅぶるっ……んはう…あふんむ…んくっんくっ！」

女教師は跪いたまま、少年を見上げる。女体の興奮も高まっていて、吐息は完全にあえいでいた。

乳房を支える掌にも力が込められ、巨尻は更に切なく震える。汗浮かせて奉仕する肢体も、軽い頂点を迎えようとしていた。

耕太への奉仕だけで、自分も性快感を得て絶頂する。その姿は、もう凛々しい女性教師ではなく、完全に少年の下僕という姿勢。

そんな愛らしい女性に、少年の肉体が性感の頂点を突破。

「っ——っ桐絵っ、先生…っ！」

臉が強く閉じられて、脳裏がフラッシュ。

「っんあああっ——わたっ——わたひもふううううっ!!」

同時に、ペニスを含んでいた唇が離れて、桐絵先生も軽い昇天へ。



「こ……こんな……イ、イヤよう……」

「そうですか？ よく似合ってますよ」

黒ネコの露出コスプレに、艶息を呑む女教師はまた、肢体を抱いて屈んで隠す。

同時に、自らの格好が容易に理解出来るせいも、こんな恥ずかしくてイヤらしいスタイルに、露出の性感が強く刺激されていた。白い肌は、既にほのかな紅葉色。

耕太がチャリつと鳴らしながらチェーンを掴むと、桐絵先生はビクつと反応。

縋るような眼差しで見上げながらも、その瞳には更なる羞恥を期待する色が、ハッキリと見えていた。

「さ、桐絵先生、お散歩です。ネコなんですから、四つん這いですよ」

軽くチェーンを引きつつ命令すると、女教師の唇から、艶めいた吐息が溢れる。

「…あ………は……い……」

しばし羞恥の躊躇いを見せると、美しい教師は裸身を四つん這いにさせて、ゆつくりと歩き始めた。

一歩、また一歩と、動物扱いされたまま、学園の校庭を散歩させられる桐絵先生。

「あふ……こんな、わたしい……」

ネコ耳と尻尾つきの半裸コスプレで、更に首輪に繋がれて、学校の校庭を四つん這いさせられている、黒髪の美女教師。

普段はキリつと理知的に、真面目に勤めている職場という日常で、こんな破廉恥な露出行為をしている自分に、Mの官能が秒単位で高められていた。

飼い主である少年は、露出ネコ教師の鎖を持つて、後ろを歩く。風俗嬢でも躊躇いそうな露出コスプレに身を包む美担任を見て、あらためて思った。

（やっぱり、桐絵先生は何を着ても、綺麗で似合うんだな）

恥ずかしい格好だけど、だからこそ真面目で知的な先生が、とてもエッチで可愛い。桐絵先生の半裸コス四つん這いに、耕太の股間も血を集めてゆく。

後ろ姿を堪能していると、黒髪と黒ネココスプレだから、ほとんどが夜に隠れてしまう。だけどその分、闇の中に浮かぶ裸の白い尻尾が、プルプルと左右に振られて扇情的だ。

歩に合わせて尻尾が揺れて、長い尻尾がフリフリ。

恥ずかしい露出の快感で先生の手足が脱力し始めると、足取りも少しフラついてきた。校庭の真ん中からランニングのコースまで出てくると、そのまま廻る。

「はあ……あん……ここ、廻るの……？」

「先生はネコなんですから、ニャン、とか以外は禁止ですよ」

「は………に、にゃん……」

素直で従順な桐絵先生の、命令受諾の返答だ。

露出ネコの半裸姿で歩かされる女教師は、誰かに見られたら、と、強い緊張感の中にい

る。それはそのまま、露出の興奮でもある。

同時に「もし誰かに見られたら……」という、Mの被虐的な官能でもあった。誰かに、他の男性教師たちに見付かってしまったら……でも、見付かったら……。そんな破滅的な妄想が頭を巡り、女体は禁忌の性興奮を高めてゆく。

「はあ……んく……あはあ……」

下を向いて質量を増した巨乳が、一步踏み出す度に左右に揺れていた。

意外とフラフラした歩きだからか、首輪の鈴が時々、チリンつと鳴る。そんな小さな音でも、露出で過敏になっていいる先生には、誰かに聞かれそうだと羞恥してしまう様子。

歩くと自然に突き出す巨尻は、深い谷底で淫具を飲み込んだ赤い後孔や、濡れて粘膜を見せる割れ目を隠す事なんて、出来ない。

飢餓感で焦らされる秘粘膜には、少年の視線が突き刺さっている。

子宮は、早くペニスが欲しいと蜜を溢れさせる肉の淫欲と、このまま恥ずかしい露出をもっと命令してくださいと言う被虐の欲求とで、ヒクヒクと収縮を見せていた。

白い肌は上気していて、ツルツルの肌は霧状の汗で覆われている。眼鏡は曇り、歩くと揺れる丸い巨尻は、粒となった恥汗を一筋流した。

「んふ……かららが……あつひい……」

暗くて静かな校庭には、少し離れた車道の音が聞こえてくる。

コースを半周も越えた頃、校門前のカーブを曲がる車の、流れゆくライトが、右から左へと素早く通過。

「っ——っひっ……！」

一瞬だけ美顔が照らされて、半裸コスプレの四つん這い美女がピクつと硬直。タイヤの音が遠ざかる二〜三秒の間、先生はその場から一步も動けなかった。

「今の運転手さん、先生の姿を目撃したかも知れませんか」

そんなイジワルを告げたら、女教師は「んん……ん……ん……」と、緊張で震える熱い艶吐息をこぼしてから、「は……はああ……」と濡れる息を深く吐いた。

歩みを再開させて、今度は背後からデジカメでパチリ。恥ずかしい姿を収められる電子音に、美尻がピクつと反応する。

「んっ——っ……イヤあ……撮っちゃは……」

ネコ語を忘れて、振り向いたトコロをまた撮影。

「先生のお尻と顔、一枚に収まりました」

「ああ……また、わたひ……」

恥ずかしい写真を撮られてしまった絶望感と、それ以上の官能に濡れる瞳。未だ必死に保っている凛々しい仮面は、涙と露出で少しずつ崩れ始めていた。

そんな危機感で責められる美顔に、少年の心臓は強くドキドキ。

先生の腹部には別の危機感も迫っていて、お尻がピクピクと震えている。さつき飲ませたお茶が、功を奏してきたのだろう。

マラソンのコースを一周して、再び校庭の真ん中へ。焦らされた飢餓感と露出の官能に子宮を灼かれた女体は、もう手足の力も抜けて震えていて、真っ直ぐ歩けていない。

「あは……はああ……お、おねがいよ……わたひ、もふ……っ！」

子宮と女体に責められる女教師の瞳は、すぐにでも少年の肉棒だけが欲しいと、強い色で訴えている。肌はシットリと汗を纏い、全身がほんのり上気していた。

そして耕太は、二つ目のご褒美を告げる。

「先生、ここでオシッコしましょうか」

「っえっ——っお、おっ——っおしっこ……って……っ！」

驚愕しながら、凜々しい瞳がトクンッと濡れる。お尻が震えていたのは、お茶の利尿作用が働いていたからだ。

つまり今、桐絵先生は尿意をガマンしている。でも。

「そ、そんな……ムリ……せめて、お手洗いに……」

耕太と二人きりとはいえ、人前で、しかも学園の校庭の真ん中で放尿なんて、真面目な桐絵先生には考えられない事なのだろう。

しかしその瞳の、理性の奥でジワんと濡れる被虐の淫欲を、耕太は見逃さない。そして愛しい女性の、根源的な愛の欲求も。

少年は、女教師の髪を優しく撫でる。

「僕の言う事が聞けないのかな？ 桐絵」

「っ——っ！」

あえて呼び捨てにした瞬間、女教師の瞳の中で、決定的に光が揺れた。

動揺と羞恥と、屈辱感と屈服と、縋って甘えたい本能。恥ずかしい半裸のネコ姿にされて、四つん這いで散歩させられる自分。

しばし内面の葛藤に苛まれた首輪の美教師は、そして自らの心に従った。

「あ……う……お、仰る……とおりに、いたし、ます……」

蕩けた瞳で、自ら少年を見上げる。その瞳は、羞恥と屈辱と、その全てを飲み込む深い被虐の官能と、魂からの歓喜で覆われていた。

これが、耕太がドキドキしながら与えた、二つ目のご褒美。教師という立場から、完全に、そして自ら決定的に転落させる事で、被虐の快感をより深めてあげる。

「それじゃ、解ってますよね」

あえて、いつも通りに丁寧に言う。そんな扱いが更に桐絵先生の心を惨めにさせて、Mの官能を深めてゆく。

限界まで開脚した女性器から、勢いよく放たれるクリアイエローの液体。恥蜜と一緒に腿を伝いながら、弧を描いて校庭にビシヤパシヤと池を作る。

キリつとキビしい知的な美教師による、猫コスでの開脚放尿という恥ずかしすぎる恥態が、耕太のデジカメで動画として撮影された。ズボンの中は、更に硬化。

「バッチリですよ。顔もおっぱいもアソコもオシッコも、全部撮れてます」

「あは…はあああああ…こんな、すがたまで…撮られてへ…あふ、撮っちゃああ…はひ…あふん…もつと、撮ってへえええ…！」

女であり続けられる最低限な、同時に、女としてもつとも恥ずべき姿。そんな恥態を撮影された美教師は、被虐的な快感で理性も蕩かされ始めている。

お茶をタップリ飲まされたせいで、終わらない放尿。校庭に現れた尿の溜まりは、更に薄く拡がりを見せている。

「さつきまで、みんなで体育祭をしていた校庭です。桐絵先生、よくそんなカッコでおしっこしてますね」

「あは…らめえ…わたひ…そうなの…こうていれ、おひっこ、ひてるのお…あはあん…っ！」

日常空間でのコスプレ、排泄。放尿の行為そのものにさえ女体が快感を得始めると、桐絵先生の焦らされた肉体は、遂にそれだけでの軽い絶頂へと達していた。

「あああああああつ——わたひつ、わたひいいつ——イイつちやふううつ——つおひつこつ——はあああああつ——オヒッコひながらイつちやふうううつ——はつあはあああつああつ——つみて、こうたくうんつ——つこうたさまはあつ、はるかひいわたひをつ、みてへええええええつ……つ！」

蕩けたカメラ目線で、自ら「耕太様」と叫ぶ桐絵先生。完全服従の言葉と涙をこぼしながら、もはや鉄仮面は蕩け落ちる寸前だ。

女教師の放尿という背德的な姿に、少年のペニスはガマンの汁を僅かにこぼした。

排泄姿を撮影されながら、男子生徒に敬語。という、惨めすぎる官能で、放たれる尿が最後に勢いを増した。

——しゃああああああああ……あああああああああああああああつ、じやつ、しゃああああああ……ちよろろろろ……ちやつ、ちよろろ……。

校庭の真ん中に一メートル程の尿池を作った、黒ネココスの半裸女教師。軽い絶頂に上げられた肢体は脱力をして、地面にヒジをつけて息を乱している。

「はああああ……あは、はあ……はあ……はああ……」

突き上げられて震える裸尻は、羞恥と快感で艶めいて汗を流し、後孔は蜜でヌラヌラしている。秘処から腿、ヒザからグラウンドへと、蜜と尿が伝っていた。

しかし焦らされた子宮は、この程度の絶頂では満足なんて、していない。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!